

## 資料

## 日本語版“HUG Your Baby” 育児支援プログラムの開発

Developing the Japanese  
“HUG (Help-Understanding-Guidance) Your Baby” program

飯 田 真理子 (Mariko IIDA) \*<sup>1</sup>  
 新 福 洋 子 (Yoko SHIMPUKU) \*<sup>1</sup>  
 谷 本 公 重 (Kimie TANIMOTO) \*<sup>2</sup>  
 松 永 真由美 (Mayumi MATSUNAGA) \*<sup>3</sup>  
 堀 内 成 子 (Shigeko HORIUCHI) \*<sup>1,4</sup>

## 抄 録

HUG (Help-Understanding-Guidance) Your Baby 育児支援プログラム (以下 HUG プログラム) は米国、ノースカロライナ州のファミリーナースプラクティショナーである Jan Tedder 氏により開発されたプログラムである。この HUG プログラムは、新生児を家族に迎えたばかりの両親に分かりやすく新生児の行動を説明し、育児のスキルを伝え、両親が児の行動を正しく理解し、出産後に肯定的な育児行動を継続することを目標としている。今回 HUG プログラムを日本において実施するにあたり、日本語版の教材を作成しプログラムを開発したので、その内容を報告する。作成にあたり、原版開発者との協働で英語版 HUG プログラムを日本語へ翻訳した。英語版を研究者らが日本語へ翻訳し、そのバックトランスレーションが行われ、英語のプログラムとの内容妥当性を確認された日本語版 HUG プログラムを開発した。翻訳した教材は HUG プログラム内で使用するスライド、2つのスキルを紹介したリーフレット、母乳育児の道のりを示したリーフレット、新生児の行動をまとめた DVD である。HUG プログラムの構成は次の通りである：育児に使える2つのスキル「新生児のズーン」「新生児の刺激過多の反応」の紹介、新生児が示す刺激過多の反応への対処方法、順調な母乳育児のコツ、2つの睡眠パターンの紹介である。そしてその後はおくるみと赤ちゃん人形を用いたおくるみレッスンと育児経験者から子育ての苦労やヒントを聞く、という構成である。HUG プログラム内で使用している教材は参加者に配布し、自宅で繰り返し活用できるようにしている。現在はプログラムの目標の達成度を測定している。参加者の反応等の分析を経て、日本の子育て文化を考慮した日本語版 HUG プログラムの更なる発展と普及に向けて、教育活動を続けていく予定である。

**キーワード：**妊娠，育児，泣き，母親学級，プログラム開発

\*<sup>1</sup> 聖路加国際大学大学院 (St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science)

\*<sup>2</sup> 香川大学医学部看護学科 (School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University)

\*<sup>3</sup> シティ大学ロンドン母子保健研究センター (Centre for Maternal and Child Health Research, City, University of London)

\*<sup>4</sup> 聖路加助産院マタニティケアホーム (St. Luke's Maternity Care Home)

2017年5月1日受付 2017年10月4日採用 2017年12月11日早期公開

## Abstract

HUG (Help-Understanding-Guidance) Your Baby is an international program, developed by Jan Tedder, a family nurse practitioner from North Carolina, USA. This award-winning program presents the newborn's body languages to new parents and shows them the skills for taking care of their newborn thus allowing them to enjoy the child-raising period. This paper introduces the Japanese version of the "HUG" program. Collaborating with Tedder, the researcher who developed the original "HUG" program, we translated the English program to Japanese then back translated to English thereby confirming the content validity. The materials we translated were: slides used in the program, a leaflet explaining the two "HUG" skills, a leaflet for helping effective breastfeeding, and a DVD that explains the newborn's behavior and the skills we introduce in the program. The "HUG" program consists of the following items: introduction of the two skills to help child-rearing, (understanding the newborn's state and understanding the newborn's Sign of Over-Stimulation), how to respond to the newborn's Sign of Over-Stimulation, cues for effective breastfeeding, and understanding the two sleep cycles. In the last part, we use swaddles and baby dolls and practice the effective way to calm a fussing or crying baby. We also invite a mother or father who is already raising a child to share their difficulties, challenges, and hints for child-rearing with participants. In the program we give the participants handouts and a HUG DVD that explain the skills we presented in the program so that they can utilize it at home whenever needed. Now we are gathering outcome data to measure the achievements of the program aims. By examining these outcomes, we will be able to consider and modify the contents of the Japanese "HUG" program for a better fit with Japanese parents.

**Key words:** pregnant, mothering, crying, antenatal education, program development

## 緒 言

現在の日本では核家族化や少子化、住環境の変化などの社会的な変化に伴い、子どもと触れ合う機会を持つことなく出産を迎え、新生児のわが子に接する女性が増加している。このことから育児不安や子育てのしにくさを訴える母親は増えている(村井他, 2014; 八重樫他, 2002)。そのため様々な状況の中で子育てをしている母親にとって、パートナーや家族からの支援は育児負担の軽減に重要である。実際、拡大家族の母親の方が核家族の母親よりも育児の困難感が低いことが示されている(Tabuchi, et al. 2011)。さらに本保他(2003)の研究においても、父親が家事や子育てによく参加している場合の母親の方が、そうでない場合の母親よりも子育て不安は低いことが報告されている。また柳原(2007)が行った父親の育児参加を促すサポートに関する調査においても、父親が参加しやすい育児教室や育児知識や情報の提供を教育的支援として望む声も報告されている。これらのことから出産前クラスや育児クラスには母親と父親の両者が参加でき、両者のニーズに沿った内容であることが求められる。

「HUG (Help-Understanding-Guidance) Your Baby 育児支援プログラム(以下HUGプログラムとする)」は、新生児の行動を両親に分かりやすく伝えることを目的としたプログラムである(Tedder, 2008)。HUGプログラムは米国のファミリーナースプラクティショ

ナーである米国ノースカロライナ大学メディカルセンターのJan Tedder氏が開発したものであり、これまでにペルシア語、韓国語、イタリア語、オランダ語、スペイン語、マレーシア語に翻訳され、数多くの臨床現場で使用されている(Tedder, 2008; Tedder, et al. 2007)。イランでは、子どもがNICUに入院している父親に対してこのプログラムが用いられ、新生児に対する知識の向上やストレスの減少に寄与することが示されている(Kadivar, et al. 2013)。日本においては2013年にHUGプログラムの開発者のTedder氏によるセミナーが開催された。セミナーには50名を超える助産師や看護師、そして助産学生や看護学生が参加し、9割以上が「HUGプログラムは親に対して教育、支援する有用なスキルと情報を与える」という設問に対して「非常にそう思う」と回答した。また、「HUGプログラムのアイデアや情報は自分の文化圏において適切だ」という設問に対して「非常にそう思う」と回答したのは74%、「そう思う」が26%であった(新福他, 2013)。このように、海外だけでなく日本においてもHUGプログラムの有用性が示されている。

HUGプログラムは母親や父親が感じる新生児の泣きに関する問題にも注目している。母親630名に対して生後1ヶ月児の泣きに対する困難感と関連要因を検討したTabuchi, et al. (2008)によると、約半数の母親が児の泣きにして戸惑い、困難な状況を経験していたと回答している。また堀越ら(2016)は生後1ヶ月児を

持つ母親に対するインタビューを行い、母親たちは児の泣きに対処できない場合には困難な思いを抱いていたと報告している。このように、親が子どもの泣きに対して抱える困難感は強い現状がみられる。社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会(2015)によると、虐待による死亡は0歳児が最も多く、月齢別にみると生後1ヶ月に満たない新生児が最多である。そして虐待の理由で最も多いのは「泣き止まないことへのいらだち」であることが報告されている。子どもの泣きが育児中の親を追い込んでいく実情を踏まえると、HUGプログラムを日本に取り入れ、実施することには意義があると考えられる。

そこで今回HUGプログラムを日本において実施するにあたり、日本語版の教材を作成しプログラムを開発したので、その内容を報告する。HUGプログラムが実施されることにより、新生児の行動を理解したいという母親と父親のニーズに応え、両親が自信と喜びを持って養育に携わり、わが子との絆の深まりが促進されることが期待される。

## 1. 日本語版HUGプログラムの開発

### 1. 原版プログラムの目的

HUG (Help-Understanding-Guidance) Your Baby 育児支援プログラム (HUGプログラム) は、小児の発達関係の医療者や研究者らの著作をもとに作成された (Tedder, 2008 ; Tedder, et al. 2007), 新生児の行動を母親と父親に分かりやすく伝えることを目的としている (新福他, 2013)。不安で落ち込んでいる母親は、新生児の笑っている顔が認識できないことが報告されており (Arteche, et al. 2011), また、母親が「赤ちゃんがずっと泣いてばかりいる」と感じると、ネグレクトや虐待につながることも示唆されている (Arteche, et al. 2011)。そのためHUGプログラムでは、新しく新生児を家族に迎える両親に分かりやすく新生児の行動を説明し、育児のスキルを伝え、産後早期の育児をサポートするような内容になっている。

### 2. 原版プログラムの目標

HUGプログラムの上位目標は次の通りである：妊婦およびパートナーが児の行動を正しく理解し、出産後に肯定的な育児行動を継続することができる。下位目標には次の5つがある：1. 新生児のゾーンを理解する, 2. 新生児の刺激過多の反応が分かる, 3. 新生

児が泣いた時の適切な対処行動を理解する, 4. 母乳育児を順調に続けるためのコツを理解する, 5. 新生児の2種類の睡眠について理解する。

新生児の行動が理解できると、母親の自信の増加、母親の自尊心の増加、父親の育児参画の増加、親子の触れ合いの改善、新生児の発達の向上、乳汁分泌の増加が見られることが示されている (Karl, et al. 2011 ; Legerstee, et al. 2008)。そのためHUGプログラムを通して新生児の行動を理解し、これらのことが達成されることを期待している。

### 3. HUGプログラムの実施者

HUGプログラムを実施できるのは、医療者もしくはドゥーラや国際認定ラクテーション・コンサルタントなどの出産・子育て支援・幼児教育に関わる専門家であり、かつHUG Your Babyインストラクターのe-learning (英語) を修了した者である。このe-learningは次の3つのコースから構成される合計6時間のコースになっている：1. 両親が子どもの行動を理解するための基本的なHUGの知識 (このコースのみ日本語版あり), 2. 子どもの発達と母乳育児成功への道のり, 3. 子育て中の両親を支援する実践的なHUGのスキル。各コースの終わりには小テストが出題され、それをクリアしなければならない。このe-learningはノースカロライナ看護協会より承認を受けており、CAPPA (Childbirth and Postpartum Professional Association 出産・産後職能団体), ICEA (International Childbirth Education Association 国際出産教育協会), DONA (Doula Organization of North America 北アメリカドゥーラ機関) 等の各団体から継続教育のコースとしても認定されている。日本での実施者はこれらのコースの修了者である。

### 4. HUG教材の日本語版への翻訳とHUGプログラム実施の工夫点

#### 1) HUG教材の翻訳過程

Tedder氏との協働で英語版のHUGプログラムを日本語へ翻訳したのは、助産師でありかつ国際認定ラクテーション・コンサルタントを取得している者、および看護学博士を取得している研究者らであった。翻訳に関わった者は全員前述の英語版のe-learningコースを修了した者であった。翻訳の際には原版の意図を忠実に再現するためにできるだけ直訳をしたが、米国と日本の文化の違い (米国は椅子に座る文化、日本は床

に座る文化)や妊娠期間の数え方の違い(米国の妊娠期間は9ヶ月、日本の妊娠期間は10ヶ月と表現)等によって内容に混乱が生じると考えた場合は、意識を行った。次に翻訳された日本語版をTedder氏が米国在住の日本人翻訳者に英語へのバックトランスレーションを依頼した。最終的にTedder氏と日本人翻訳者が英語のプログラムとの内容妥当性を確認し、日本語版HUGプログラムを開発した。

## 2) 翻訳したHUG教材

翻訳した教材はHUGプログラム内で使用するスライド、2つのスキルを紹介したリーフレット、母乳育児を続けるための道のりを示したリーフレット、新生児の行動をまとめたDVDである。

視聴覚教材を用いて育児スキルを学んだ親は、育児スキルを向上させ、育児に自信が持てることが報告されている(Paradis, et al. 2011)。そのためHUGプログラムでは新生児の反応について視覚的な理解を促すため、新生児の行動をまとめた20分程度のDVDを教材として使用している。特に新生児の3つのゾーン、新生児が示す刺激過多の反応、睡眠パターンに関しては初めて知る参加者が多い。そのためHUGプログラム中で該当箇所のDVDを一部見せ、そして参加者がそれを自宅で繰り返し活用できるようDVDを1枚ずつ配布している(図1)。DVD以外にも、育児に使えるスキルを紹介したA4二つ折りのリーフレット(図2)、母乳育児の道のりを示したA4片面一枚のリーフレットを参加者に配布している(図3)。

## 3) 日本語版HUGプログラム実施の工夫点

HUGプログラムは母親もしくは両親への個別指導として実施してもよいし、集団に実施してもよい。日本語版HUGプログラムを開発した際には、紹介している育児スキルを実践できるようにおくるみの効果的な使用方法と、子育てのイメージを持ちやすくできるようにゲストスピーカーによる経験談の語りを含めた。また、参加者同士の交流が図れるように、HUGプログラムでは参加者4-5組がまとまって座れるような配置を工夫した。そして自己紹介やフリートークの時間、おくるみの使用方法の時間にはファシリテーターがそこに加わり、参加者同士の交流が図れるように、そしてHUGプログラムの内容が理解できるように支援をした。

このようにHUGプログラムは参加者同士の交流と参加型の学習も取り入れているため、参加者は最大で20組、プログラム実施者およびファシリテーターは



図1 HUGのDVD



図2 育児に使えるスキルを紹介したリーフレット



図3 母乳育児の道のりを示したリーフレット

表1 HUG Your Babyプログラムの構成

プログラム構成	使用教材	所要時間
始まりの挨拶 自己紹介と参加者同士の交流		15分
育児に使える2つのスキル スキル1「新生児のゾーンを理解する」 スキル2「新生児の刺激過多の反応が分かる」 (フリートーク) 新生児が示す刺激過多の反応への対処行動 順調な母乳育児のコツ 2つの睡眠パターン	HUGプログラムのスライド HUGのDVD 2つのスキルを紹介したリーフレット 母乳育児の道のりリーフレット	40分
休憩		10分
おくるみの効果的な使用方法 おくるみの巻き方レッスン	おくるみ 新生児人形	30分
ゲストスピーカー 育児経験者からの子育て経験談		10分
終わりの挨拶 個別の質問タイム		15分

参加者の人数に合わせて4-5名で開催している。

## 5. 日本語版HUGプログラムの構成と内容

### 1) 日本語版HUGプログラムの対象者

対象者は妊娠30週以降の初産・経産の妊婦としており、同伴者は1名まで許可している。

### 2) 日本語版HUGプログラムの構成と内容

HUGプログラムは2時間の内容であり、構成は表1の通りである。まず育児に使える2つのスキルの紹介、新生児が示す刺激過多の反応への対処方法、順調な母乳育児のコツ、2つの睡眠パターンの紹介である。そしてその後はおくるみと赤ちゃん人形を用いたおくるみレッスンと育児経験者から子育ての苦労やヒントを聞く、という構成である。

#### (1) 育児に使える2つのスキル

ここでは次の2つのスキルを紹介している：スキル1「新生児のゾーンを理解する」、スキル2「新生児の刺激過多の反応が分かる」。これらを通して親に新生児の行動の理解を促す内容になっている。

スキル1は「新生児のゾーンを理解する」ことであるが、HUGプログラムの中では、医療職者ではない一般の参加者に分かりやすいよう、HUGゾーンと呼んでいる。新生児学の文献(Brazelton, 1973)においては、新生児の状態を6つに分けたステートが知られているが、HUGプログラムでは、それを一般の方にも分かりやすいように大きく3つの「ゾーン」に分けて説明している。睡眠ゾーン(Resting Zone)、準備ゾーン(Ready Zone)、再起動ゾーン(Rebooting Zone)の3つである(図4)。睡眠ゾーンは児が眠っている時、

## <赤ちゃんのいるゾーンを理解する>



Resting  
睡眠ゾーン

Ready  
準備ゾーン

Rebooting  
再起動ゾーン

図4 新生児の3つのゾーン

準備ゾーンは児が母乳やミルクを飲んだり遊んだりする準備が整っている時、そして再起動ゾーンは、児が泣いている時を指す。このゾーンを正しく理解し、児の授乳をしたり音の鳴るおもちゃに反応する様子などを通して児と遊んだりするには、児が準備ゾーンにいないと難しい。つまり児が寝ていたり、大泣きしていると難しいということである。ここでは、睡眠ゾーンにいる児の起こし方(ノンレム睡眠中は起きないので、レム睡眠に移行したら起こすということ)、再起動ゾーンにいる児のあやし方(刺激を減らす、優しく声を掛ける、おくるみをする、軽く揺らす、授乳をするという方法)を伝授する。

スキル2は「新生児の刺激過多の反応が分かる」である。ストレス反応というと一般的にはネガティブに捉えられる場合があるため、HUGプログラムでは「刺激過多のサイン(Signs of Over-Stimulation: SOS)を



図5 新生児の刺激過多のサイン (Signs of Over-Stimulation : SOS) の行動のSOS

送っている」と説明し、HUG SOSと呼んでいる。

SOSには「からだ」と「行動」の2種類の反応があり、からだのSOSには肌の色の変化(もっと白くなったりピンク色になる)、からだの動きの変化(スムーズな動きから、ピクピクと痙攣するような動きになる)、そして呼吸の変化(早く途切れ途切れの呼吸になる)が含まれる。行動のSOSには、目で追わない (Spacing Out)、目をそらす (Switching Off)、目を閉じる (Shutting Down) が含まれる (図5)。新生児自身が刺激の多さから刺激を避けるために見せる反応ではあるが、両親は新生児が自分を避けているのかと思ったり、もっと近づいて声を掛けて、反応を確かめようとしたりすることがある。しかしそうすることは逆効果であり、更に反応が薄くなったり、再起動ゾーンに入って泣き出したりすることがある。Nugentら (2009) は、児の啼泣を上手にあやし、児の睡眠や授乳を促進し、親子の相互作用を高めるために、児のこのような行動を観察し、効果的に対応するよう母親や父親に説明する必要があると述べている。

#### (2) 新生児が示す刺激過多の反応への対処方法

前述の新生児からSOS、つまり刺激過多の反応を知った上で、次にそのSOSへの対処方法を説明する。ここでは英語のTell me what TO Do (「どうしたらいいか教えて」) のフレーズをヒントに伝えている (図6)。まず“T. O. Do”の“T”は“Talk”, つまり新生児に「話す」ことである。新生児に落ち着いた口調で繰り返し話しかけるように伝える。次に“T. O. Do”の“O”は“Observe”, つまり新生児を「観察する」ことである。新生児は自分の唇や指を吸ったりするような動きをと



図6 新生児が示す刺激過多の反応への対処行動

り、自らを落ち着かせようとする行動をとる。最後に“T. O. Do”の“Do”では様々な行動をとる。これには新生児の両手を胸の前に持っていったり、おくるみでくるんだりすることが含まれる。

#### (3) 順調な母乳育児のコツ

ここでは生まれたばかりの新生児の胃のサイズをビー玉に例えて伝え、新生児は出生直後から多くは飲まないこと、そして母乳は新生児の吸啜によって分泌量が増えてくることを説明している。また新生児の「早めの飲みたいサイン」を見せて、そのサインに気づいて授乳をできるように伝えている。さらに、出生直後だけでなく長期的に母乳育児を継続するためのコツを「楽しく順調な母乳育児を続ける道のり」リーフレットを渡して説明している。この資料も日本語に翻訳したものである。このリーフレットでは、母乳育児を一つの道のりとして捉えられるよう、妊娠中から子どもが1歳になるまでを時間軸に沿って児の発達や変化が読み取れるように作成されている。

#### (4) 2つの睡眠パターン

ここでは新生児のREM睡眠(アクティブな浅い睡眠)とnon-REM睡眠(静かな深い睡眠)の特徴とそのサイクルのことを説明している。そして早産児や低出生体重児、体重の増加不良など様々な理由により時間授乳をしなければならない場合には、REM睡眠の時に起こすとスムーズであることを伝えている。

#### (5) おくるみの効果的な使用方法

参加型の学習は能動的な方法として学習効果が高いことが知られている(日本医学教育学会, 2009)。そこでHUGプログラムでは新生児が刺激過多の反応を

見せた時の対処行動の一つとしておくるみを用いることを内容に含めている。使用するおくるみの素材はモスリンコットン100%であり、大きさは120cm×120cm、通気性に優れ、柔らかく、新生児の肌に優しいものである。ここでは参加されている方全員にこのおくるみと新生児人形を渡し、実際におくるみの巻き方を実演している。

#### (6) ゲストスピーカー

最後は育児経験者からの子育て経験談である。毎回ゲストスピーカーをおひとり招いて、その方の経験談を話してもらっている。その時により、母親の立場からだったり父親の立場からであったりするが、参加している方よりも少し先輩の立場からの体験談は臨場感があり、参加者はこれからの自分たちの生活のイメージを持ちやすくなる。

## II. 今後の展開方法

現在日本語版HUGプログラムは聖路加国際大学のPCC (People-Centered Care) 実践開発研究部の事業の一環として行っている。この部署では、市民と医療者がパートナーとなり、市民が主体の健康生成を目指して様々な方策の研究を行っている(聖路加国際大学市民中心のケア:PCC, 2017)。そのため米国で開発された育児支援プログラムが日本の対象者のニーズに沿った内容になっているか様々な方面から検討をしていく必要がある。

HUGプログラムの目標は、参加者が新生児の行動を正しく理解し、出産後に肯定的な育児行動を継続できることである。この目標の達成度を測定するために、アウトカム指標として母親の自信や自尊感情、自己効力感、児に対する愛着、育児困難感等をHUGプログラム前後で測定している(事後はHUGプログラムの直後と出産後1ヶ月、3ヶ月である)(柏原, 2016)。海外ではこれらに関してポジティブな結果が得られており、日本の状況を現在調査、分析しているところである。これらの分析結果をもとに今後、日本語版HUGプログラムの有用性に検討を行う予定である。

また調査の内容には、配布している教材の使いやすさや出産後の実際の使用頻度も尋ねている。このように教材の短期および長期の役立ち度も聞き取ることで、妊娠期間中に得た情報を育児期にいかにか活用したかもしくは活用できなかったか、その理由はなぜかを把握し、より効果的な教材作成を検討していく。

現在行っているHUGプログラムのリクルートは、産科施設の外来への掲示やSNSを通して行っている。出産前教育に参加している父親の育児家事実施意欲はそうでない父親よりも有意に高いことが報告されており(塩澤ら, 2007)、HUGプログラムを多くの母親および父親に知ってもらい、参加してもらう方法を検討していく必要がある。

参加者の反応等の分析を経て、日本の子育て文化を考慮した日本語版HUGプログラムの更なる発展と普及に向けて、教育活動を続けていく予定である。

## 謝 辞

HUG Your Baby 育児支援プログラムの日本語版を作成する許可をいただきましたJan Tedder氏に感謝申し上げます。またHUGプログラム開催の前後で質問紙調査にご協力をいただいている対象者の方々、リクルートにご協力いただいている施設の方々にお礼申し上げます。

本研究は聖路加ライフサイエンス研究所助成金(研究代表者:新福洋子)の助成を受けて行われました。

なお本稿は2016年ICMアジア太平洋地域会議(横浜)および第30回日本助産学会(京都)において発表した内容に一部加筆・修正したものです。

## 利益相反

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

## 文 献

- Arteche, A., Joormann, J., Harvey, A., Craske, M., Gotlib, I. H., Lehtonen, A., et al. (2011). The effects of postnatal maternal depression and anxiety on the processing of infant faces. *Journal of Affective Disorders*, 133(1-2), 197-203.
- Brazelton, T. B. (1973). Neonatal Behavioral Assessment Scale. *Clinics in Developmental Medicine* No.50 (pp.4-8). London: William Heinemann Medical Books.
- Kadivar, M. & Mozafarinia, S. M. (2013). Supporting Fathers in a NICU: Effects of the HUG Your Baby Program on Fathers' Understanding of Preterm Infant Behavior. *Journal of Perinatal Education*, 22(2), 113-119.
- Karl, D. J. & Keefer, C. H. (2011). Use of the Behavioral Observation of the Newborn Educational Trainer for teaching newborn behavior. *Journal of Obstetric, Gynecologic, & Neonatal Nursing*, 40(1), 75-83.

- 柏原由梨恵 (2016). 育児支援プログラム「HUG Your Baby」の有用性～産後アンケートとインタビューを通して～. 2016年度聖路加国際大学大学院課題研究.
- Legerstee, M. & Markova, G. (2008). Variations in 10-month-old infant imitation of people and things. *Infant Behavior and Development*, 31(1), 81-91.
- 本保恭子, 八重樫牧子 (2003). 母親の子育て不安と父親の家事・子育て参加との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 13(1), 1-13.
- 村井智郁子, 林知里, 横山美江 (2014). 母親の育児に関する相談事と背景要因. 日本公衆衛生看護学会誌, 3(1), 2-10.
- 日本医学教育学会監修 (2009). 医療プロフェッショナルワークショップガイド. pp.6-9, 東京: 篠原出版新社.
- Paradis, H., Conn, K., Gewirtz, J., & Haltetman, J. (2011). Innovative delivery of newborn anticipatory guidance: A randomized, controlled trial incorporating media-based learning into primary care. *Academic Pediatrics*, 11(1), 27-33.
- 聖路加国際大学 治験と研究サイト. 市民中心のケア: PCC. <http://research.luke.ac.jp/pcc/introduction.html> [2017-04-04]
- 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会 (第11次報告) (2015). 平成27年10月 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000099959.pdf>
- 新福洋子, Tedder, J. (2013). HUG your baby: エビデンスに基づいた産後早期の育児サポートツール. 看護教育, 54(12), 1114-1118.
- 塩澤真由美, 石田貞代, 萩原結花 (2007). 出産後早期における父親の育児家事実施意欲に関する研究 母親の期待・性役割態度・出産準備教育との関連. 母性衛生, 47(4), 582-589.
- Tabuchi, N., Shimada, K., Kameda, Y., Sekizuka, N., & Sakai, A. (2008). Mother's feeling of distress and related factors resulting from the crying of her one-month-old infant. *Journal of Japan Academy of Midwifery*, 22(1), 25-36.
- Tabuchi, N., Shimada, K., & Kameda, Y. (2011). Relationship between maternal distress associated with 1-year-old infant crying. *Journal of the Tsuruma Health Science Society, Kanazawa University*, 35(1), 45-52.
- Tedder, J. (2008). Give Them The HUG: An Innovative Approach to Helping Parents Understand the Language of Their Newborn. *Journal of Perinatal Education*, 17(2), 14-20.
- Tedder, J. & Register, N. (2007). The "HUG": an innovative approach to pediatric nursing care. *The American Journal of Maternal Child Nursing*, 32(4), 210-214.
- 八重樫牧子, 小河孝則 (2002). 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 12(2), 219-239.
- 柳原真知子 (2007). 父親の育児参加の実態. 天使大学紀要, 7, 47-56.